株式会社 地域環境計画

2004. No.23

News Letter

◆サクラスミレの花◆

◆ エイザンスミレ ◆

◆ サクラスミレ ◆

スミレと種子散布

◆みなさんは、サクラスミレという植物をご存じでしょうか。サクラスミレは花が大きく、美しいことからスミレの女王と呼ばれています。サクラスミレという名前は、花弁の先端が桜の花びらのように凹んでいることからついたといわれていますが、必ずしも凹むとは限らないようです。

私が初めてサクラスミレと出会ったのは今年の春。ある業務で、サクラスミレの生育状況や個体の成長段階を調査する機会がありました。サクラが咲きほころび、多くの植物が芽生えんとする頃、いち早くフサフサの産毛をまとった葉を伸ばし、3cm程の大きな薄紫色の花を咲かせていました。サクラスミレについて調べていくうちに、スミレの仲間（以下スミレとする）に面白い生態があることを知りました。ここでは、スミレの花と種子散布に着目して紹介します。

◆スミレは開放花と閉鎖花という2種類の花をつけます。開放花はいつも私たちが目にしているスミレの花であり、主にハナバチの仲間が受粉に貢献しています。閉鎖花は春から秋にかけてひっそりと実を作る花で、つぼみのように閉じたままで結実するため、私たちの目に留まることはほとんどありません。この2種類の花をつけることには大きな意味があります。開放花は受粉を昆虫に頼るのでリスクはありますが、他個体と遺伝子のやりとりを行うことで、遺伝的多様性の高い種子を作ることが出来ます。閉鎖花は自家受精を行うため、遺伝子は同じものですが、高い確率で結実し、たくさんの種子を作ることが出来ます。質と量を兼ね備えたこの方法は次世代を残していく上でとても有効です。

◆では、作られた種子はどのように散布されるのでしょうか。スミレの種子散布にはアリが深く係わっています。スミレの果実は、種子が熟すと上を向き、3つの果皮片（種を乗せている舟のようなもの）に分かれます。その中には2、3列に並んだ種が入っており、乾燥によって、ボート型の果皮片の両側が内側に湾曲します。その圧力によって種子をはじき飛ばします。このように植物自体の力で種子を散布することを自動散布といいます。散布された種子には、エライオソームと呼ばれるアリの大好物の部分が含まれており、アリがスミレの種子を見つけると、巣に運び、エライオソームだけを食べます。食べ残された種子は巣の外に捨ててしまうことが多いようです。そこで根をはり、次の世代をスタートするのです。このようにスミレは自分の力で種を飛ばし、アリの力を借りることにより、さらに遠くへ種子を運んでもらうのです。

◆このように、何気なく生育している植物でも、全ての植物の色や形は進化の過程で淘汰されて、選ばれた形質なのです。もちろん、今の姿形も進化の途中を切り取って見ているにすぎないのですが。「なぜ？」という疑問を持ちながら自然を見つめ直すと、今まで以上に身近に感じることが出来るのではないでしょうか。

（東京本社自然環境研究室・寺下史恵）

目次

エッセイ　スミレと種子散布 ―― 1
業務紹介　鳥獣保護法の話 ―― 2
マンガ　調査員物語 ―― 5
Report　猪名川の野草教室 ―― 6
Information　自然環境分野におけるGIS－GIS NEXT－ ―― 7
ある日のフィールドノートから　「あっ、子ジカ」 ―― 8